

聖書・神話・フォークロアの知識



●プロフィール

柴田ひさ子
同志社女子大学大学院文学研究科修了。
バベル翻訳大学院 文芸・映像翻訳専攻修了。
バベル翻訳大学院インストラクター。

監訳書『マンガ 聖書の時代の人々と暮らし』（バベルプレス）第2版好評発売中。

翻訳者に求められる能力としてよく挙げられるのは、『聖書』や神話、フォークロア（民間伝承）の知識である。西洋の文芸作品には、これらを主題としたものや、何らかの形で影響を受けているものが多い。C.S. ルイスの「ナルニア国ものがたり」は『聖書』のアレゴリーであるし、ファンタジー作品には魔女やトロールなどの伝承や北欧神話・ギリシア神話などの影響を受けているものが多い。これはなにもフィクションに限った話ではなく、いわゆる Cultural Competence は、どのような翻訳においても要求されることと思う。これについて最近出会ったいくつかの実例をご紹介します。

仕事に涙はつきもの？

しばらく前、バベル翻訳大学院でマクロビオティックという食事療法の本を修了作品に選んだ学生さんがいた。ご存知の方も多と思うがマクロビオティックは穀物と野菜を中心とした食事法である。その本にもさまざまな穀物が登場した。キヌア (quinoa)、アマランサス (amaranth) など最近よく目にする雑穀のほか、Job's tears という名の穀物があった。なんだか悲しい名前である。「労働は苦しいものだから、泣きたくもなるさ」などと思ってしまいそうだが、じつはそういう意

味ではない。Job が大文字で始まっていることにお気づきの方は、もうおわかりだろう。Job は人名である。「仕事（ジョブ）の涙」ではなく、「ヨブの涙」である。「ジュズダマ」というイネ科の植物で、「ハトムギ」と同属らしい。

「ヨブ」は「旧約聖書」に登場する。もとは裕福だったが、財産と子孫を一度にすべて失い、やがて健康まで奪われる、いわば“苦難”の代名詞のような人物である。だから、「涙」も多く流したに違いない。

『聖書』の人名表記

固有名詞の表記というのは、なかなか厄介なものである。よく知られた例だが、あのオードリー・ヘップバーンの「ヘップバーン」と、ヘボン式ローマ字の「ヘボン」は、じつは同じ綴り (Hepburn) だという。どちらの表記もすっかり定着しているので、この先どちらか一方に揃えて“オードリー・ヘボン”とか“ヘップバーン式ローマ字”となることは考えにくい。このような例外もあるが、固有名詞はだいたい原音に近い表記にしようである。つまり、英語で書かれたものは、できるだけ英語の発音に近い表記にする。だが、『聖書』の人名に関しては、このルールをそのまま当てはめるわけにはいかないようだ。

昨年、バベルの Co-PUB 共訳作品『聖書人名事典』（仮称）のオーディションをしたときのことである。応募された訳文のなかに、この“原音表記主義”をきっちり守って、すべて英語読みで表記されたものがあった。ダビデ王は「デービッド」、イエス（キリスト）は「ジーザス」、イエスの母マリアは「メアリー」という具合に。残念ながら、この訳文は通用しないと思う。おそらく、読者が

持っている『聖書』は、圧倒的多数が日本語で書かれたものだろう。ならば、現在出回っている『聖書』の主要な日本語訳の表記に合わせるべきである。翻訳にとりかかる前に、まずは、『聖書』の日本語訳を調べる必要がある。ちなみにさきほどの「ヨブ」は、英語読みでは「ジョウブ」となる。長年、『聖書』に親しんだ人でも「ジョウブ」が「ヨブ」のことだとは、わからないのではないだろうか。

『聖書』の日本語訳

そんなわけで、翻訳者は少なくとも一冊は『聖書』の日本語訳を手元に置いておくべきだと思う。英日対訳になったものなら、なお望ましい。国際ギデオン協会が無料で配布している対訳聖書をお持ちの方もいらっしゃると思うが、これは「新約聖書」のみの場合が多い。やはり、「旧約聖書」と「新約聖書」の両方を収録しているものを用意したい。

現在、出ている『聖書』の日本語訳としてポピュラーなのは、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会）、『新改訳聖書』（日本聖書刊行会）、『聖書 口語訳』（日本聖書協会）である。とくに「新共同訳」は、多くのキリスト教会やキリスト教主義学校で用いられていることと思う。さきほど『聖書人名事典』のオーディションの話をしたが（わたしは監訳をつとめた）、このワークショップでも最初に“新共同訳”の表記を用いるという方針を決めた。そのうえで、他の二つの訳をお持ちの読者に配慮して、“新改訳”、“口語訳”の表記からも引けるようにした。つまり、本文は“新共同訳”の表記で統一したが、見出しとなる人名には“新改訳”、“口語訳”の表記も入れて、それぞれ後ろに“新改訳”なら（改），“口語訳”なら（口）という記号を付けた。ちょっとした気配りで使い勝手が良くなるのなら、手間を惜しんではられない。……というと偉そうだが、じつはそんなにたいへんな作業ではなかった。なにしろ、今は便利なツールがある。監訳の際に大活躍したのは、『J-ばいぶる』（いのちのことは社／ライフ企画）というCD-ROM

である。先に挙げた三つの日本語訳聖書と英訳聖書二つ（New King James Version と Today's English Version）が収録されており、表記や訳の比較が一度にできる。じつに便利である。

ちなみに“新共同訳”の“共同”というのは、カトリックとプロテスタントが共同で翻訳したという意味である。“新”と付くからには、その前に“共同訳”があったわけだ（1978年、日本聖書協会より刊行。現在は講談社学術文庫に入っている）。だが、この“共同訳”は不評だったらしい。というのも、それまでカトリックでは「イエズス」、プロテスタントでは「イエス」としていたのを、「イエズス」としたからだ。“原音表記主義”を採用した結果、そうなったらしい。ご存知のように、『聖書』の原典は、旧約はヘブライ語、新約はギリシア語である（したがって、さきほどの「デービッド」や「ジーザス」の例は、原書が英語で書かれているという点では“原音表記主義”だが、扱っている『聖書』という題材を中心に考えると“原音表記主義”ではない、ということになる）。さすがに「イエズス」は定着しなかった。1987年に刊行された“新共同訳”では“原音表記主義”を取りながらも、慣用が定着した一部の人名についてはそれを尊重することになり、カトリックがプロテスタントに歩み寄る形で「イエス」に落ち着いた。

わたしが通っている教会で現在用いているのは“新共同訳”だが、以前は“口語訳”が使われていた。たとえば、“12弟子”のひとりで、イエスが裁判にかけられたとき三度イエスを知らないと言った人物は、“口語訳”では「ペテロ」だが“新共同訳”では「ペトロ」である。ダビデ王が少年時代に石で倒した巨人も、“口語訳”では「ゴリアテ」だが、“新共同訳”では「ゴリアト」である。微妙な違いだが最初は少々抵抗があった。どちらが良い悪いという話ではなく、なかなか頭の切り替えができないのだ。『聖書』では「ペトロ」でも、賛美歌では「ペテロ」となっていたりするから、なおややこしい。何はともあれ、現在でもこうした複数の表記が存在していることをご理解いただ

きたい。大切なのは、翻訳において“口語訳”の表記を使うと決めたら最後まで“口語訳”、“新共同訳”を使うと決めたら最後まで“新共同訳”で通すことである。

石炭と小枝

ここまで長々と『聖書』の話をしてきたが、翻訳をするうえでは『聖書』の正典に入っていないさまざまな伝承についての知識も要求される。

現在、Co-PUB でクリスマス为主题にしたフィクションの翻訳を進めているところだが、その中に、サンタクロースがいたずらっ子には「石炭と小枝 (lumps of coals and switches)」をプレゼントしようと言うくだりがある。それを聞いた子どもたちがおびえた表情をするのだが、なぜ「石炭と小枝」なのか、なぜ子どもたちがおびえるのかわからなかった。lumps には「仕置き」、switches には「むち打つこと」という意味もあるらしい。さらに coals について調べると、昔、燃える石炭の上で異端者を引きずり回す刑があったことがわかった。ならば、もう少し「お仕置き」を連想させる訳語を使ったほうがいいのではないだろうか。

そんなコメントを付けたところ、この箇所を担当された訳者さんが掲示板に意見を寄せてくださった(こうしたやりとりが活発になされるのが、ワークショップの利点である)。「いくら悪い子でもサンタがそこまでするかしら」と疑問に思いつつ、さらに調べを進めてくださったとのこと。それによると、lumps of coal は、クリスマスプレゼントのなかでも「もらって嬉しくないもの」の代名詞のように使われるらしい。ウェブサイトのなかには、a candy cane (紅白の杖型キャンディー) と lumps of coal を対比させているところもある。前者は「もらって嬉しいもの」というわけだ。また、bundles of switches も lumps of coals と同じく「もらって嬉しくないもの」として使われているようだ。小枝も石炭くずも、火を起すのに使われる。たしかにこんな「つまらないもの」をプレゼントされたら、それだけで十分

「お仕置き」といえるかもしれない。

そんなやりとりがあったあと、『キリスト教歳時記——知っておきたい教会の文化』八木谷涼子・著(平凡社新書)に次のような記述を発見した。「ヨーロッパの一部の地方、とくにドイツ、スイス、オーストリア、ベルギー、オランダ、チェコなどでは、この日の前晩か当日、司教姿の聖ニコラウスが子どもたちをたずね、よい子にはおもちゃやお菓子を配ることになっている。悪い子に対しては、お供(悪魔や冬の精霊たち)のムチとか、石や炭のプレゼントが待っている。そのため、この日が近づくと子どもたちは神妙に家の手伝いをしたり、聖ニコラウスに乞われたときのため、歌の練習やお祈りの暗唱に励む。ある地域では、子どもたちがプレゼントを受けとるのはこの日だけ。また別の地域では、この日とクリスマスの二回、贈り物を手にする幸運な子どもたちもいる。「この日」とは、サンタクロースのルーツとされる聖ニコラウスの日(12月6日)のことである。

じつをいうとわたしはプロテスタントの信徒なので、聖人や祝祭日についての知識に乏しい。この『キリスト教歳時記』には、それぞれの祝日をどの教派で祝っているかを示す印がついている。「◎=とくに重要な祭日/○=祝日/×=祝日ではない」といった具合である。それによると、プロテスタントで◎がついているのは、クリスマス、ペンテコステ(聖霊降臨日)、イースター(復活祭)ぐらいで、ほとんどの祝日には×がついている。キリスト教の伝承には、聖人にまつわるものも多く、こうした方面の知識を強化する必要性を感じている。

サンタの8頭のトナカイ

祝祭日の話をもう少し続けよう。日本ではクリスマスに比べてイースターの知名度は今ひとつだが、キリスト教においてイースターはクリスマス以上に大切な祝日である。イースターといえばエッグ・ハントが有名である。家の中や庭に卵を隠し、誰がいちばんたくさん見つけられるか競争する。卵はイースター・バニーとよばれるウサギ

が隠たとされる。臆病なウサギは夜の間にやって来るので誰も見た人はいない、というわけである。イースター・バニーの言い伝えが、いつ、どのようにして始まったのかはわからない。ただ、卵もウサギも昔からヨーロッパの春の祭りにおけるシンボルであったのは、たしかなようである。卵は命のしるし、ウサギは多産なので豊穡のしるしとされてきた。

ハロウィーンは魔女や幽霊など異教的な色彩の強い祭りなので、キリスト教の暦には入っていない。だが、英語の Hallow-e'en は All-Hallow-Even (hallow は聖人) のことで、「諸聖人の前夜」という意味になる(前出『キリスト教歳時記』参照)。翌日の11月1日は「諸聖人の日」(万聖節)というキリスト教の祝日である。ハロウィーンの伝承としては jack-o'-lantern (かぼちゃ提灯) の由来となった「ジャック」の話がおもしろい。長い話になるのでここではご紹介できないが、興味のある方はぜひ調べてみていただきたい。

ハロウィーンが終わる頃、気の早い街ではそろそろクリスマスの飾りつけが始まる。サンタにまつわる話で最近もうひとつ知ったことがある。それは、サンタのトナカイにはすべて名前がついているということ。サンタクロースの名を全米に広めるきっかけとなった「聖ニコラウスの訪問」(1822年)という詩の中には8頭のトナカイが登場し、そのすべてに名前がついているという。ただ、そこには「赤鼻のトナカイ」の歌で有名な「ルドルフ」は含まれていない。つまり、「ルドルフ」は9番目のトナカイ、というわけである。このように祝祭日にまつわる伝承は時代を経るにつれ、いろいろに進化していくようである。

正典・外典・偽典

さきほど『聖書』の正典には入っていないさまざまな伝承と書いたが、じつは『聖書 新共同訳』には、「旧約聖書続編つき」として正典以外の13書が収録されているものもある。それらは、“ア

ポクリファ”(「隠されたもの」というギリシア語に由来)とか“外典”と呼ばれるもので、最初の10書は、カトリック教会で“第二正典”とされているという。たとえば有名な天使「ラファエル」の名は正典ではなく“第二正典”の「トビト記」に出てくる。このほか、『聖書』に入らなかった文書の中には“偽典”と呼ばれるものもある。正典に名前が出てくる天使は「ミカエル」と「ガブリエル」だけだが、“偽典”の中には数多くの天使が登場するものもあるようである。天使やサタンは文学の題材としてポピュラーなものだが、正直言って、わたしにはわからないことだらけである。

ここまで、限られた知識の中から少しでも翻訳に役立ちそうだと思うことを述べてきた。文化的背景の下調べは、場合によっては実際の翻訳作業より時間がかかるかもしれない。とにかく、翻訳者は「物知り」であることよりも、「わからないことはわかるまで調べる」、「知ったかぶりはない」ことが大切なのだと思う。読者のためにサービス精神を発揮して徹底的に調べる。これこそ、いちばん大事な Cultural Competence と言えるのではないだろうか。

